令和5年度 第2回高梁市地域包括支援センター運営協議会（報告）

日時：令和6年2月20日（火）

13：30～15：00

場所：高梁市役所3階大会議室1

《出席者》

前原委員、角銅委員、森末委員、元田委員、水谷委員、林委員、山下委員、森田委員、仲田委員、原委員

《事務局》

赤木健康福祉部長、内岡健康福祉部次長、大森健康づくり課長、秋森地域医療連携課長、東健幸長寿課長、山本参事、森本所長補佐、赤木所長補佐

1. 開 会（内岡所長）

2. あいさつ（会長）

高梁市包括支援センターの運営状況について、令和5年度の事業報告、6年度の運営方針について皆様のご意見を色々いただければと思っております。

3. 協議事項（仲田会長進行）

（1）地域包括支援センターの運営状況について 資料1（内岡所長）

国から、地域包括支援センターの事業にかかる評価指標が示されており、この指標に基づくチェックシートを国に報告しています。

高梁市地域包括支援センターと全国平均、全国の地域包括支援センターの平均の比較になります。全ての指標をクリアしており、全国の平均を上回っております。

○質問・意見

（委員）

この評価の点数を何点と決められたのはどなたですか。

（事務局）

厚生労働省が作ったもので、全国の地域包括支援センターが同じように事業評価をしています。

(委員)

よく頑張っておられると理解しました。

2. 令和5年度高梁市地域包括支援センター事業報告 資料 2-1

①高梁市における高齢者と介護保険の状況について説明 (赤木所長補佐)

②重点的な取り組みについて報告 (森本所長補佐、山本参事)

市民公開講座での寸劇DVDを10分視聴

○質問・意見

(委員)

新規の要支援の介護認定者というところで、国、県と比べて高梁の方は84.2歳で、健康の人が長いとか、高梁市の方の平均寿命を全国と比べるとどうなのか把握されていますか。

(事務局)

高梁市の平均寿命は調べていませんが、人口が約2万7000弱で、そのうち70名の方が100歳以上です。全国平均を見ますと、10万人あたり、73.4人というデータがありますので、高齢化率を考えても、2万7000人弱で、70人の100歳以上の方がいらっしゃるというのは、かなり高齢な元気な方が多いと思っております。

(委員)

新規の介護認定結果が、要支援1、2よりもむしろ介護1から3が高くなっていると説明されたが、通常であれば要支援1、2があつて徐々に段階を踏んでいくと思うが、いきなり要介護になる方が多いことはどのように考えられているか。

(事務局)

調整済み認定率を見ると、国・県よりも低く、健康な高齢者が多いのではないかと思っております。介護度の分布をみると要介護が多い状況となっております。令和4年度に介護予防日常生活ニーズ調査では、65歳以上の方で介護認定を受けてない方が対象で、何らかの介護が必要だが現在は受けていない方が約8%~10%おられましたので、介護認定が必要な方は受けていただきたい。

(委員)

それは皆さん我慢されているのか、できるだけ自分で頑張るという意識が強いというこ

とでしょうか。

(事務局)

本当に支援が必要な方は介護認定をしていただけるように皆さんのご協力で申請につなげていただきたい。

(委員)

介護認定申請するのは、本人、家族が1番多いですか。地域の方や民生委員もいるか。

(事務局)

調査したものではありませんが、医療機関からのすすめが多く見受けられます。

(委員)

ミニデイサービスで、要介護認定が出たからミニデイサービスが来られなくなったと言われる方が結構おられる。中には認定を取り下げた方もおられる
ミニデイサービスの利用者の増減が非常に激しい。そのことを今後どう考えておられるか聞かせていただきたい。

(事務局)

介護認定を取り消してミニデイサービス行かれる方も中にはおられます。

本人・ご家族が介護サービスを必要と判断された時に介護認定を受けるのが本来で、必要が無ければ受けていただく必要はないと考えます。

(委員)

ミニデイサービスに行かれていて、人の繋がりができて行くのが楽しみな方が、家族は介護認定を受けた方がいいと思い、介護認定を受けたら要介護1が出てしまった。今までの友達に会えないのは寂しいということですかね。

(委員)

確かにそれもある、楽しいので月に1回の回数をもっと増やしてほしいという声もあるが、担い手の問題でお世話する方の問題が1番大きい。

(委員)

法律的にミニデイサービスは、要介護の認定を持っている人は行けないのか。

(事務局)

法律ではなく、制度として対象ではありません。

要介護認定が出る方でも、ミニデイサービスで生活が成り立っているのなら、介護認定を受けていなくても良いと考えます。

(委員)

制度上、無理なこともあるが、人と人との繋がりが認知症進行を弱めてくれる可能性があるのもので、地元や個人の事情に合わせた、制度も考えてもらえるとありがたい。

(委員)

お守りで認定を持たれるのは分かりますが、プランの終了というのはどういう状況でしょうか。

(事務局)

1番多いのは住宅改修が終わった後にその他の介護サービスを利用されない方です。

3. 令和6年度の運営方針について(内岡所長)資料3

毎年度4月末までに運営方針を運営協議会の協議を経て方針を出す必要があり、その前にお諮りするというものです。設置目的、設置主体、運営上の基本的考え方も変更はございません。

地域包括支援センターが平成18年度に設置しまして17年経ちますが、一般的な知名度が低く、高齢者から相談をしたい時にどこに相談したらいいかわからなかったという声をよく聞いております。9月のあの議会でもご質問いただき市民の皆様にとってわかりやすい通称を今検討しております。誰のための機関なのかが分かるような通称名を検討しています。基本的には地域包括支援センターの名称を使用しますが、その地域の状況に合わせて親しみやすい名称を使用しても構わないとされていますので、通称名の検討を進めております。

○質問・意見

(委員)

地域包括支援センターという名称以外は思いつかない。一般の方にどういう名前がいいか聞かれた方がいいのでは。

(事務局)

一般の方々にお聞きするのは大変時間かかるため、案を出した上で健康福祉部職員全員にアンケートで投票してもらう予定。

(委員)

この前別の会議で、支援というのは地域住民の全員がメンバーに入るというような概念だと理解をしている。高齢で1人暮らしの方とか、まだ介護認定まではいかない方々を支援していくのは重要なこと。一方で、小学校が消えて地区は消えるというのが定説ですので、小学校がなくなるのは地域にとってショックだと思う。

例えば地域包括支援のシステム内で、子供たちが学校の授業が終わって、普通は学童いるに行き、それから自宅が通例ですが、子供たちが認知症カフェで一定時間を過ごし自宅に帰っていく。ミニデイサービスに参加している人たちと話をしていたら、お母さんが迎えに来る、というようなものがあると、小学校がなくなっても地域の人たちとの繋がりが日々保てるのではないか。地域の消滅ができるだけないようなシステムを組み上げられないか。

(事務局)

教育委員会の方で、学校再編の取り組みをしている。子供たちの放課後の過ごし方をどうしていくのか課題であると思っています。包括的な居場所にするのか、教育委員会の放課後子ども教室、学童保育等、子供たちの居場所をどのような形で地域に残し、統合するのか。スクールバスでの通学になるので、バス待ちのために学童保育の活用も考えられます。子供たちの過ごしやすい環境と、地域が衰退しない形をどう作っていくかは、今後考えていかなければならないと思っている。

(委員)

そういう言葉を聞いただけでも良かった気がします。どうぞよろしく願いいたします。

(委員)

高齢者にとっても、子供たちと接するというのは、核家族や1人暮らしの方が多いため、人と接することによって元気が出る、健康寿命の延伸に繋がる、平均寿命の延伸に効果的な取り組みだと思う。様々な制度の難しい面があると重々承知はしているが、何かできる取り組みが高梁からできたらと今回も聞かせていただきました。

(委員)

重点的な取り組みを積極的にされている。健康マージャンの取り組み、通称付添サポートは車を運用するので大変だと思う。ICTの利用で、前回はケアキャビネットの補助金無くなり、LINEWORKS がうまくいけばいいと思います。

認知症の街頭啓発もパネル展示とかをにぎやかな所でされたらどうかと意見がありましたが、イズミ・ポルカでされていて努力をしていると思いました。

ボランティア養成講座を2会場でされ、今後も増える。ボランティアの人たちの協力は、今の社会絶対必要であると思います。

個人情報の保護で、センター職員は守秘義務を持つのは当然なので心配してないが、ボランティアを含めて、個人情報の守秘義務とか人権の尊重が一番大事で、認知症の方の尊厳を守りながら気やすく声をかけていただくこと大事だと思います。

(委員)

包括的な活動支援で、成羽では公民館活動の一環として、子供の放課後事業で将棋教室に1年生から6年まで、18名が参加しておりました。

4. その他 (赤木所長補佐)

オレンジガーデニングプロジェクトのご説明。春になったら種を撒いて、オレンジ色の花が咲いたら、写真を携帯で撮っていただいて、QRコードから包括に送っていただきたい。

5. 閉会 (副会長)

高齢化社会の中で、1人でも救える、支えていけるようなことができたらいいと思いました。